

～はじめに～

川崎市議会欧州海外視察団 団長 鍋本 茂哉

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分に発生した、宮城県牡鹿半島の東南東沖 130km の海底を震源とするマグニチュード 9.0 の大地震は、死者・行方不明者 1 万 8 千人超という甚大な被害を我が国にもたらした。この大地震に起因した東京電力福島第一原子力発電所の炉心溶融の被害も相まって、多数の方が未だ避難先での困難な生活を強いられており、本市としても、東日本大震災避難者支援金制度や就学援助制度等を創設し、被災地に職員を派遣するなどの取組を継続して行っている。

福島第一原子力発電所の事故は、市民の皆様のご生活と市内産業の基盤というべき電力の供給に大きな影響を与え、本市でも、計画停電を経験したことは、非常時における危機管理の重要性を強く認識させられたものである。

こうした状況に加えて、欧州の債務危機を背景にした景気減速、超少子高齢化社会の急速な進展等、本市は、これまで類を見ないような非常に困難な情勢に置かれている。これらの困難に対処するためには、我々が培ってきた従来の手法に加え、新たな発想に基づいた斬新な手法を取り入れている状況やその背景などをつぶさに視察し、もって、海外諸都市の先進事例を積極的に学ぶことにより、それらの成果を市政に反映させていくことが求められている。同時に、市民の皆様にご理解いただけるよう、説明責任を十分に果たさなければならないと考えている。

こうした視点から、視察に先立ち、参加会派の代表から成る検討プロジェクトを立ち上げ、その中で入念な検討を重ねた結果、「エネルギー政策」「環境技術」「高齢者・障害者福祉施策」の 3 つのテーマを選定した。いずれも、本市が取り組むべき重要な課題であり、今後の激化が予想される国際間競争で、本市が確固たる地位を形成していくために、積極的に取組まなければならない課題である。

欧州視察団では、このテーマに基づき、「スマートシティ・プロジェクト

ト」「高齢者福祉施設調査」「フライブルク市環境政策」等の視察内容を選定し、調査を実施した。詳細な報告は、各担当者がまとめているので、ご高覧いただきたいが、今回訪問した各都市は、ヨーロッパの伝統的な歴史と眩いほど燦然と輝く文化芸術を生んだ風土を有しており、この歴史と文化芸術を土台とした現代のまちづくりを視察することは、本市の今後の歩むべき方向性を示すに、必ずや役立つものと確信している。

また、今回の視察先では、友好都市であるオーストリア・ザルツブルク市を訪問している。本市とザルツブルク市は、平成4年4月、市内の洗足学園前田ホールにおいて友好都市提携合意文書に署名して以来、様々な交流を深めてきた。ミューザ川崎シンフォニーホールを巡る関係でも、開演ベルにザルツブルク大聖堂の鐘の音が使用されていること、モーツァルテウム管弦楽団がコンサートを開催し、シャーデン市長一行が同席したこと等、枚挙に暇がない。

とりわけ、東日本大震災で甚大な被害を受けたホール復旧の支援に、ザルツブルク音楽祭のゲネプロの収益金から20万ユーロのご寄附をいただいたことには、多くの市民の皆様が感謝の念を抱き、ザルツブルク市に対して一層の親近感を覚えたことと思う。市民の代表たる市議会としては、市民の皆様の感謝の気持ちをお伝えし、ザルツブルク市との交流をより一層推進していくことが責務であるとの考えから、シャーデン市長、ザルツブルク市議会各会派の議員及びザルツブルク市当局の皆様にお会いして、心からの謝意をお伝えしてきたものである。

視察までには、3回の勉強会を実施して、効率的な視察の実現に努めたが、勉強会の講師の皆様には、大変なご尽力をいただいた。また、視察先でも多くの方々にご協力いただき、有意義な視察を実現することができた。関係の皆様には、この場をお借りして深く感謝申し上げたい。

私たちは、人間として悠久の時を過ごしてきたと思っているが、地球の長い歴史の中では、ほんの僅かな一瞬に存在しているに過ぎない。その一瞬にも輝きを放ち、より世界を小さくするために地球を歩き回ることの意義を、この視察を通じて改めて強く感じた次第である。